
かななぎ 同人編

YSR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かななぎ 同人編

【Nコード】

N1699J

【作者名】

YSR

【あらすじ】

神薙かななぎの木を材料にして作った木像精霊像が突然顕現し、女の子になって動き・喋り出した！

そんな見た目は女の子の神様ナギと、それを顕現させた張本人である仁を主人公にした漫画『かななぎ』が遂に同人編で登場！

泣きあり笑いあり、「ギャグかと思ったらシリアス」（作者談）な原作を再現できているのか！？

今、YSRの無謀（？）な挑戦が始まる！

（あ、非エロです、念為）

第一幕 ナギたんのドキドキホームセンター（前書き）

・・・勿論、タイトルは第二巻第某幕のパクリです。

第一幕 ナギさんのドキドキホームセンター

—

「今こそパワーアップが必要です!」

「・・・は?」

ある休みの日のこと。ナギは、オオ又サを持って、仁に詰め寄っていた。

「このオオ又サのことじゃ」

「・・・和紙が、古くなってる?」

「そうじゃな・・・いやそうじゃなくて!このオオ又サの素材のことじゃ」

「プラスチックだろ」

仁は即答した。

「まあそうなのじゃが・・・そこが問題なのじゃ」

「どういうことだ?」

「踏んだだけで折れるような棒じゃ、妾は不安で仕方がない。これから強大な敵が出てくるかもしれんし、ざんげのこともあるし・・・」

「

「ざんげちゃんがどうかしたのか?」

「・・・いやいや!なんでもないぞ」

「?」

「と、とにかく、このオオ又サを象が踏んでも折れないぐらいのものにしたいのじゃ」

「(それ『壊れない』だろ・・・)・・・なるほど。じゃあナギ、ホームセンターにでも行くか」

「そこでパワーアップできるのか!?」

「ああ。多分な」

二人は早速、出発の準備をした。

「ここがホームセンターというものか・・・広いのう」

「・・・あまりはしゃぐなよ」

正直なところ、仁はあまりナギをホームセンターに連れて行きたくなかった。ナギの興味を引く物が沢山ありすぎて、おとなしくさせるのが大変そうだからである。

「・・・石とかも売ってるのじゃな」

置かれた大理石を見て、ナギは仁につぶやいた。

「まあ、基本『ホーム』だけに建築関係から始まったらしいからな・・・さあ中に入るぞ」

「ああつ、ちよつと待つのだじゃ!」

「・・・とりあえずナギはそれをどうしたいんだ?」

「そりゃ、パワーアップ・・・」

「それはそうだけど、どうやってパワーアップさせんだよ。テープを巻く・・・のはもうしてるから、もっと強度を上げる方法を考えるべきだな」

「そうじゃな・・・あ!」

ナギは、ある物体に向かって走り出した。

「あ、ナギ!勝手に行くな!」

しぶしぶ仁も、ナギの方へ駆け出した。

「おお、これは・・・」

ナギが手に取ったのは、直径2cmほどの重い鉄パイプだった。

「オオ又サをこれに通せば、ざんげなど敵ではないわ、ふっふっふ・・・」

パイプを持ちながら不気味に笑っていると、追いついた仁が呼びかけた。

「おいナギ、お前・・・」

「なんじゃ？」

「まさか、それを使う気じゃないだろうな？」

「そうじゃ仁。これさえあればざんげなど・・・」

「そんなもん使ったら、ただでさえ減った男性ファンが激減することになるぞ」

「うー！」

冷静な仁の発言に、ナギはたじろいだ。そして、パイプを棚に戻した。

「・・・仕方ないの。こいつは無しじゃな・・・」

「最初からそうしろよ・・・」

次にナギが手に取ったのは、塩化ビニールのパイプだった。

「これならどうじゃ？鉄パイプほど凶悪じゃないじゃろ？」

「（それってさっきの自分は凶悪だと言ってるような・・・）まあな・・・なあっ！？」

仁は驚いた。それもそのはず、そのパイプの長さは3mもあったのだ。

「これならざんげも近寄れまい」

「・・・ファンも近寄れなくならないか、それ？」

「う・・・」

「大体そんなもん振り回せるのかよ」

「それも、そうじゃな・・・」

そのパイプも、ナギは棚に戻した。

「これでどうじゃー！」

今度は、50cmほどの塩ビパイプを手にとった。

「最初からそれにしろよ・・・」

「うるさいのお。でも、灰色はちょっといやじゃのう」

「そんなの白く塗っちまえば済むじゃんか。差し込むんだったら、

内径間違えるなよ？」

「わかっておるわ。ちゃんとオオ又サ・・・」

「!？」

仁は身構えた。まさか、あのおもちゃオオ又サを持ち込んだのか!？」

「・・・の幅を紙に測つてあるし」

「・・・ほっ」

仁は安心した。これで変な目で見られることもない・・・。
だが、事件は起こった。レジにて、パイプとスプレーとトイレツトペーパー（安売りしていた）入りのかごをレジ台に置くと、レジ係の人の目が、仁の方を向いた。

あの時のような、微妙な表情だった。

三

「・・・もうナギをホームセンターに連れてくのは止めよう・・・」

「何を言つとるのじゃ。早速作業するぞ」

既に家の中。下に新聞紙を敷き、塩ビパイプを置いてナギはスプレー缶を振っていた。

「・・・今度はちゃんと新聞紙を敷いたな」

「と、当然じゃろ！周りに塗料が付いては大変じゃからな！」

万一付いたら自腹だろうし、ということは、心に秘めていたナギであつた。

「さあ、塗るぞ！」

「ちよつと待てナギ。お前、塗装したことあるか？」

「あ、そう言えば・・・無いな」

「やつぱり・・・」

「神社は宮大工が塗ってくれるもんじゃからな。ちよつとは眺めたりもしたが、500年も寝ていたんじゃさっぱり忘れてしもつたわ」

「だろな・・・」

神様に塗装させる人などいるはずは無い。しかも、技術の授業を受けたことがあるわけでもないのだ。

仕方なく、仁はナギに塗装の基本を教えた。

「いいか。間違っても厚く塗るんじゃないぞ。薄く何回も塗って色を付けるんだ」

「わかった」

「後、乾燥は十分に保てよ。扇風機はこのために持ってきたんだからな。夏でもないのに」

「わかっておる」

「後・・・ミスるなよ？」

「わ、わかっておるわ！いくぞ・・・」

ナギは、スプレーのボタンを押した。

「・・・初めてにしては、上手くいったな」

「じゃろ？妾はこういう一発芸とかは得意でう」

「（『芸』！？）・・・そうだったのか・・・」

また一つ、ナギの秘密を知った仁なのだった。

「ただ、ちよつと気分がよろしく・・・な・・・」

スプレー缶を持ったまま、ナギはよろよろと倒れた。

「な、ナギ！？・・・あ！」

仁はダッシュで窓に近づき、そして全開にした。そして、ナギを抱えて窓際まで連れて行った。

「やつべー・・・しっかり換気するの忘れてた・・・大丈夫か、ナギ？」

「ま、まあな・・・」

体調が回復した後、最後の組付けを行った。

・・・が。

「・・・おい、ナギ」

「なんじゃ？」

「これ、・・・はまるのか？」

見ると、パイプを通そうとしても、オオ又サの尾端の突起が邪魔で入らない。

「はまらんな・・・」

「『はまらんな』じゃないだろ！ちゃんと『内径を間違えるな』って言っただろ！」

仁の声が思わず大声になる。

「だ、大丈夫じゃ！ほら・・・」

仁の剣幕に少しおびえながらも、ナギはその突起を持って回した。すると。

「・・・な！」

「・・・はああ！？」

そう。その突起が、きゆるきゆると回って、外れたのである！

「ね、ネジ止め式だったのか！？」

「そうじゃ。・・・知らなかったのか？」

「いや普通知らねえだろ！秋葉が聞いたらなんと言っただろうな・・・」

「まあとにかく組み付けるぞ」

そう言っただけは、そのオオ又サをパイプの中に差し込んだ。

突起がないせいか、パイプの中にすんなりとオオ又サははまった。

「お。上手くいったな」

「後は上下を接着剤で付ければ完成じゃな」

「・・・上下？」

「なんか妾はおかしいことを言っただか？」

「・・・いや、差し込んだから根元（上）を付けるのは分かるが、何で先端（下）の方も？」

「決まっておろう。これを付けるためじゃ！」

・・・ナギが突き出したのは、さっき外した突起だった。

「ああ・・・なるほどね・・・」

四

「・・・どうじゃ？」

「おー、よく出来てるな」

接着も完了。無事に、オオヌサのパワーアップは終わった。

「くるくる回しても問題ないぞ」

「まあ、でも無理するなよ」

「さっそく鞆に入れてみるわ」

そう言って、ナギは鞆のある方へ走り出した。

（ナギ、うれしそうだな・・・）

そう仁は、すこしにんまりした。
その時。

「あー！ー！！」

向こうでナギの叫ぶ声。

「なんだナギ！どうかしたのか！？」

仁はナギの方へ駆け寄った。するとナギは、一言仁に、こう言った。

「・・・長すぎて鞆に入らん」

「・・・」

少しの、しかし長い沈黙の後、仁の口が開いた。

「剥離材・・・使うか？」

第一幕 ナギさんのドキドキホームセンター（後書き）

・・・ええ。オオ又サですとも。鉄パイプですとも（笑）。

間違つても、鉄パイプ配合オオ又サは食らいたくないですよね（笑）

そう言えば、ざんげちゃんのあの看板、木ですよ？まさかとは思いますが、互いに振り回したら、木の方が圧勝したりして・・・。

・・・いやいや！ざんげちゃんもぶん回して勝つほど「恐ろしい子」ではないと思いますよ！？多分・・・。（つか格闘技でナギが負けそう・・・）

第二幕 神達の仁義なき戦い（前書き）

遅れてすみません。「かななぎ 同人編」、第二幕です。

第二幕 神達の仁義なき戦い

—

「ただいま。・・・ん？」

その日。仁が家に帰ると、ナギが電話機の前で立ち尽くしているのを見つけた。

「どうしたんだナギ、そんなところで立ち尽くして・・・」

そんなことを言おうとすると、仁は、ナギの顔が青ざめていることに気づいた。

「妾が・・・妾ともあろう者が・・・」

それを見た瞬間、仁はナギの元へ駆け寄った。

「一体どうしたんだナギ。顔が青いぞ」

「あ、あれ・・・」

そう言いながらナギは、電話機の方を指差した。

「・・・電話機？」

仁が振り向くと、電話機の留守電ボタンが赤く点滅している。

再生ボタンを押した。すると、再生開始の音の後、ざんげの声で、次のようなメッセージが再生された。

「はい、ざんげちゃんですーす。世界史で85点も取っちゃいましたー。今回は私の勝ちですわね、ね・え・さ・ま？」

一通り流れた後、ナギの口が開いた。

「これで分かったじゃろ。妾がこうして落ち込んでいる原因が」

「・・・え？」

「なんじゃ、分かんのか」

「いや、ざんげちゃんが世界史の点数を言っているぐらいしか分からないんだが・・・」

「・・・まあ、そう解釈するのも仕方無いかの」

「？」

「定期テストがあるじやろ。あれがあるたびに、妾とざんげとで点数の競争をしているのじや。勿論学年が違うから、妾は日本史、奴は世界史でじやな」

「あ。それでざんげちゃん・・・」

「そうじや！日本の神とあろう者が、日本史を取って普通負ける筈無いじやろ！？」

「そりやそうだよな・・・」

「そこでじや。これから妾は奴に決闘を申し込む」

「・・・はあ！？なんでそうなるんだよ！？」

「仁には分からぬかも知れんが、神たる者、プライドと言うものがあるのじや。このままじや気が済まんし、第一奴にのさばらせる事になる。だからそうするのじや」

「いやいや・・・いくらなんでもそれは逆恨みじゃねえのか・・・」

「それに、一度奴と真剣に戦ってみたくなった」

「・・・」

仁はナギの目を見た。本気である。

そして仁は悟った。これは、止めても無駄かも、と。

数日後。川原で、二人の神様は、10mほどの間隔を置いて対峙していた。

「遂に雌雄を決することになるな、ざんげよ」

「多少格闘技の心得のある私が、姉さまなんかに負けるとお思いで？」

「当然じや！そうでなきゃこうして決闘なんかせんわ！」

「ふふっ・・・その心意気だけは認めますわ」

互いに見定めている二人の横で、何故か美術部の面々がビデオカメラとマイクを構えていた。

「・・・マイクは、この高さでいいんだよね？」

マイクを掲げながら、大鉄は、ビデオカメラをいじっている秋葉に聞いた。

「ああ。このビデオカメラにもマイク機能はあるが、独立しているのよりは性能は劣るからな」

秋葉がそう答えると、くると部長らの方に向き直って突っ込んだ。

「・・・って、何ただの観客になってるんですか!？」

「いいじゃない。一番機械の扱いに慣れているのは秋葉君なんですよ?」

「・・・別に僕は慣れてる訳じゃないですよ。なんだかんだで撮らせるから自然と上手くなってるんですよ・・・」

「ま、そうね。紫乃はどっちが勝つと思う?」

「難しいですわね・・・つぐみさんは、どう思われます?」

いきなり話を振られ、横にいたつぐみは焦った。

「えっと・・・どちらかと言えばナギさんに勝ってほしいな・・・」

「どうしてよ」

「いや・・・だって・・・ねえ、仁もそう思うでしょ?」

今度は仁に話が回ってきた。

「お、俺か?・・・まあ、つぐみと同じだな」

「理由は?」

「理由はって・・・あいつが負けたりなんかしたら落ち込むだろうからな・・・」

「確かにナギ様だったらそうなるかもね」

貴子がそう納得したところで、動きがあった。

「こつちから先に行くぞ!」

そう、終に戦いは始まったのである。

二

先に動いたのはナギだった。

手にしたオオ又サを振り回しながら、ざんげに迫る。

「あら姉さま、私がてぶらだと言つのに姉さまだけが武器を持つな

んて卑怯じゃありません？」

バックステップで避けながら、ざんげは尋ねた。この時ざんげは、普段手にしている看板を地面に置いていた。

「武器じゃないわ、被具^{はいうぐ}じゃ！それに、手ぶらじゃったら、おぬしは確実にケガレを投げつけてくるじゃろ！？」

ナギはざんげと違い、神木が健在ではないお陰で神力が落ちているのである。ケガレを直に触ると、穢れてしまうのだ。

「あら、姉さま、気付いてましたのね。でも今更ですわよ！」

そう叫びつつざんげは、ナギに、服に隠してあったケガレを投げつけてきた。

「どわっ！？」

今までざんげに接近していたため、避けきれず、とっさにオオヌサで被った。

「幸いケガレは、普通の人や、ましてやビデオカメラに写るものではないですからね」

そう言いつつ、ざんげは、二、三匹ケガレを投げつけながら、ナギと距離をとった。

「ぬう、飛び道具とは卑怯な……！」

被ったりかわしたりしながら、ナギは悔しそうな顔をしながらざんげと離れた。

「ねえ御厨」

そう仁に聞いたのは、貴子である。

「さっきから二人が言ってる『ケガレ』って何？」

「さ、さあ……」

流石に、細かいことを他人に話すわけにはいかないだろう。仁は知らないふりをした。

「でも、どうやらナギさんにとっては嫌な物らしいですね……」
紫乃が呟く。

「確かに……でも、ビデオカメラにも写ってないもんなあ」

ファインダーを覗きながら、秋葉も呟いた。

「ねえ仁、ほんとに知らないの？」

「知らないって、ホントに。それより、なんでざんげちゃんは看板を持ってないんだろう？」

あまり追求されても困るので、仁は話を逸らした。

「そういえばざんげちゃん、いつもの看板持っていないわね」

貴子が返答する。どうやら上手く話は逸れたようだ。

「体力を消耗したくないんじゃないんでしょうか？あんな長い物を振り回していれば、そのうちバテますよ」

「あ、なるほど」

秋葉の答えに、全員が納得した。

「そもそも姉さまは、ある重大なことに気付いていません」

ナギの周りをゆっくりと旋回しながら、ざんげはナギに説いた。

「な・・・なんじゃと？」

ナギが動揺する。しながらも、その体はざんげの方へと向けられていた。

「それは・・・姉さまより私のほうが喧嘩慣れしているということですよ！」

そう叫びながらざんげは、素早くナギの右側面へと回りこみ、そして右フックをナギの顔に掛けてきた。

しかし。ナギはそれをしゃがんでかわし、そして少し離れて立ち上がった。

「ふっ。妾とて、何も対策せずに来た訳ではないわ」

「！」

自分のパンチをかわしたことに驚きつつも、ざんげはさらに追撃を掛けた。だが、上手くかわされて当たらない。

「そんな馬鹿な・・・！」

そう叫びつつ、少し疲弊したざんげは、一旦ナギの方から離れた。

その攻防に、美術部員らは沸いていた。

「ナギさんすごい！」

「ナギ様、運痴じゃ無かったのか・・・」

「どう言うことよ御厨！なんであんなに動けるのよ！？」

「し、知らないですよ！なんか徹夜で、格闘技のビデオ見ていたらしいけど・・・」

「それだけであんなに動けるものかな・・・？」

三

次に動きがあったのは、それからすぐのことである。

ブンブンとオオ又サを振り回しながらの攻撃を、ざんげは浮きながらかわしていた。

それを見計らって、ナギはざんげに足払いを掛けた。

「きゃあ！」

ざんげはしりもちをついた。

即座にナギは近寄り、そしてオオ又サをざんげの顔に突きつけた。

「どうじゃざんげ。分かったじゃろ。妾が本気になればおぬしなんぞ・・・」

そのような口上を述べている間に、ざんげは立ち上がって反撃しようとした。

しかし、ざんげは腰の辺りに、何かが切れるような音がしたのを感じた。

「（・・・え！？これって・・・！）」

その時ざんげの脳裏に浮かんだのは、ここ数週間の食生活だった。「（そう言えば、このごろ儲かって、ケーキとかをよく食べていたわ・・・！）」

己の行動に激しく反省しつつ、後ずさりしながらざんげは立ち上がった。

「やりますわね姉さま。でも・・・」

「なんじゃ」

ある方向に擦り寄りながら、ざんげは話を続ける。

「ここからは、私も本気でいきますよ！」

そう言っでざんげは、地面の看板の柄を掴み取った。

その頃部員らは、完全に観戦客と化していた。

「あ、ナギ様ががんばれ！」

「よし、よく避けた！」

「そこよナギ様、そこ！」

口々に叫んでいる中、マイク係の大鉄が、ふと、皆に問いかけた。

「なあ……」

「？」

「二人とも、自分の服装が何か分かっていないのか？」

「！」

その時の二人の服装は、いつものシスター服と、いつものミニスカ服であった。

二人のバトルを見ていたらなかなか気付きづらいところだが、確かにその通りである。

「なるほど……」

「確かに……」

皆が納得していると、つぐみが声を出した。

「あ、でもナギさんの方は大丈夫だよ」

「何でそんなことが言えるんだ、つぐみ？」

仁が聞く。すると。

「だって、ほら……」

つぐみが指差す方には……スカートの中にジャージ（短）を装備しているナギの姿があった。

「……つぐみが教えたのか？」

「だってほら、喧嘩は嫌だけど、するとしたらナギさんには全力で戦ってほしいなって……」

「嫌なんなら止めろよ、そこで」

「だって・・・ナギさんの目を見たら・・・」

そこまで話をしていた時、大きな風切り音と、ナギの叫び声が聞こえた。

「どわっ!？」

看板が水平に飛んできたため、ナギはとっさにバックステップで回避した。

「あ、危ないじゃろっ!」

「何ですか姉さま？喧嘩とは常に危ないものなのではないのですか？」

そう言いつつ、近づいてくるナギに容赦無く看板を振り回す。

「ぬうつ・・・!」

看板のリーチは才オヌサの倍以上ある。ナギも、ざんげから離れながら様子を見る他無かった。

「なるほど、看板ね・・・」

「明らかに看板の方がリーチあるもんな・・・」

「ざんげちゃんも本気が・・・」

皆が口々に言う中、つぐみは何かに気が付いた。

「そう言えば、今度はざんげちゃんの方が動かなくなったような・・・」

その発言に、皆は口を揃えてこう聞いた。

「・・・え？」

四

自分の発言で一気に視線が自分に向いたことに動揺しつつ、つぐみは喋った。

「だってほら、最初はざんげちゃんがナギさんの周りを回っていた

けど、今はナギさんがざんげちゃんの周りを回っているでしょ」

「・・・本当だ」

「そう言えばそうね・・・」

「最初はオオ又サの方がリーチが長かったからなんだろうけど、今度はそれが看板になったのか・・・」

その頃、つぐみの指摘通り、ナギが様子を窺う戦いとなっていた。

「（ぬう、隙が無い・・・）」

そう感じながらも、ナギはちよくちよくオオ又サを振り下ろしていた。

「もつと近づかないと当たりませんわよ、姉さま」

そう言いつつも、ざんげは常に看板を構えていた。

「分かっておるわ!」

ナギは叫んだ。しかし、内心苛立ちを感じていた。

「（あの看板がじゃまじゃの・・・なんとかして止める方法は・・・）」

そう考えているうちに、ナギは立ち止まってしまった。

その隙をざんげは見逃さなかった。

「油断大敵っ!」

速やかに接近して、ざんげは看板をナギに向かって斜めに振り下ろした。

「!」

咄嗟にバックステップしつつ、ナギは看板に垂直にオオ又サで遮った。

しかし。オオ又サは、看板の勢いに負け、ボキッと折れてしまった。

「そ、そんな・・・」

「トドメです!」

ざんげは、最後の一撃をナギに叩き込もうとした。・・・ところが。

腰の辺りにまた、何かが切れるような音がした。そしてその音は、ざんげを我に返らせた。

「しまったっ！」

思わず看板を落とし、そして両手を腰にあてがった。

その瞬間。

「食らえっ！」

ナギが投げたオオヌサの一部が、ざんげの顔に直撃した。

「~~~~！」

その激痛に、ざんげは、片手を顔にあてがい、そのまま倒れこむしかなかった。

「終わった！」

「ざんげちゃん!?」

「大丈夫か！」

戦いが終わったことを知ると、皆は、カメラが回っていることも忘れて二人の元へと駆け寄った。

そこには、肩で息をして立っているナギと、いまだに顔と腰をおさえたまま座り込むざんげの姿があった。

最初にナギの方に駆け寄ったのは仁だった。

「ナギ！」

「仁！」

疲弊と緊張からの開放感が、泣き出しそうになっているナギに、仁はねぎらいの言葉を掛けようとした。が、その時仁は、ボツキリと両断されているオオヌサを発見した。

「（あっ・・・!）」

それを見て、思わず仁はナギの頭に空手チョップを掛けた。

「痛っ!・・・何するのじゃ！」

「『何するのじゃ』じゃねえだろ!? 踏んただけで折れるような棒が木の看板に勝てる訳ねえじゃねえか！」

「・・・そうじゃった!」

「『そうじゃった』じゃないだろ・・・ナギ」

「?」

「お疲れさん」

「・・・うん」

最初にざんげの方に駆け寄ったのはつぐみ達だった。

「ざんげちゃん、大丈夫?」

「うう・・・姉さまの奴・・・!」

「ま、これでナギ様の方が強いと証明された」と

「冗談じゃありません!今度戦ったら私の方が・・・痛ててて・・・」

「つまり」

大鉄が呟いた。

「結局ざんげちゃんは最後まで守り切ったと言ったことか・・・」

「・・・何を?」

第二幕 神達の仁義なき戦い（後書き）

色々ありましたが、なんとか書ききりました。

格闘技にはあまり詳しくないので、そこらへんの突込みがあるかもしれないと、内心びくびくしながらの投稿でした。

次回はちょっと専門的になるかも。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1699j/>

かななぎ 同人編

2010年10月9日18時27分発行